

妊娠と薬

「熱っぽくて、風邪だと思って薬を飲んでしまったんですが・・・」。 「胃の調子が悪くて、内科の先生から薬を頂いて飲んだのですが・・・。その時胃のレントゲンも一緒に撮ったのですが心配ないでしょうか」とまず、問診を始めて主訴の多くは「妊娠ですよ」と告げると、「本当ですか？私、薬を内服していたのですが」と心配そうに話す。

妊娠初期に薬を飲んだという妊婦さんが意外に多く驚いている。そんな時、学生時代の臨床実習や、医師になったばかりの頃「女性を診たら、妊娠と思え！」と口やかましく先輩に言われたことを思い出す。

しかし現実には厳しく、本人の口から「生理が遅れているのですが」とか、「妊娠しているのですが」と言われないと、妊娠のことなど考える余裕などなく、医療行為が行われてしまっているのが現状ではないかと思う。特に、慢性の疾患(アレルギー性鼻炎・じんましん蕁麻疹など)があり、薬を飲み続けているような場合や、

また生理不順だったりすると、案外本人自身が妊娠と気付かず薬を飲み続けてしまうことも少なくない。夫や姑に散々とが咎められて、泣きながら相談に来られたケースもあった。ほとんどの場合、心配のない薬であり説明を聞き安心して帰って行くケースばかりで、内心ホッとしている。

動物実験では、なかなか催奇性の証明をすることが難しくても、サリドマイドのように、妊娠初期にごく少量服用しただけでも、アザラシ肢症といった四肢の奇形を発現してしまう薬もあり、「妊婦さんにとって絶対安全という薬はないんですよ！」と時々説教をしてしまうこともある。

やっと妊娠したのに知らずに大量の薬を飲んだために中絶して、その後なかなか妊娠しにくく受診してくる人。流産を繰り返し驚いて外来を訪れる人。妊娠初期に薬剤を処方しなければならない場合には、本当に頭を悩ませてしまうことが多い。また内服してしまった薬に対して、胎児に影響は無いと思われるので、「妊娠を継続するように」と指導した場合には、無事出産が終わるまで、その妊婦さん以上に心配しているのが本音である。

患者さんによっては、合併症を持っているために薬を飲み続けなければならない場合、合併症の持つ危険性と薬剤自身が胎児に及ぼす危険性から、妊娠しないように説明しても、「自分が犠牲になっても子どもを産みたい」と言って妊娠して来られるケースもある。

途中で流産したり、子宮内胎児死亡になったり、生まれた子どもに明らかに合併症を認め、薬物が原因と思われる異常も診ている。そんな状況でも、誰一人挫折をした人はいなかった。母親の強さに敬服する反面、生まれた子どものことを考えると複雑な気持ちを禁じ得ない。より安全に、かつ慎重に薬物療法をしなければと常日頃考える。